枇杷園句集

乾

911.3
ビ
乾・坤

士朗先生以刀圭餘暇。纂蓬
翁（ノ）至（リ）先蓋篤（シ）雅（ク）多
士（リト）悉（ク）来（リ）会（ス）二（ニ）常（ヒ）於（テ）五（ツ）経（ノ）其
不（ル）若（キ）而（ノ）為（ス）者（ノ）名（ヲ）南（ヲ）曰（フ）某
樹（ト）一（ツ）赤（キ）松（ノ）擁（シ）膏（ヲ）掩（ヒ）以（テ）影（ヲ）画（ク）
曰（フ）松（ノ）把（ヲ）周（ト）踈（ニ）而（ノ）蓋（ス）（ル）某

隔ス四旬ヲ矣ノ辣ノ爲ニ故ヲ或ハ
病ニ臥シ猖獗ニ因テ人心ヲ自ラ縁慕
莫リ能ハ不レ言也。東ヨリ望ム月。
猶ホ新ナルガ如シ。影ヲ簷ニ下ル樹。
先生對スルノ之ヲ。是レ名ク煙霧ト
疾也。重ネテ賞シ殊ニ切ナリ。

下ニ放ニ不レ吟ジ。高多ク嘗テ趣ヒ
應ニ。又吟ジ高山嶽ニ而帰リ先生
ノ聲。業ヲ二勝相ヒ並ベリ笑。
此ノ集ノ以テ早ク付ス梓ニ堂薹ノ高
幸ニ洋ニ杜ノ之ヲ不レ軒ラ也。
君ノ来ニ庵ニ〻ヲ頓ニ来ヲ先生

俳諧家久足ノ墓ニ題セシ集ニ
而状ニ貫リ(スルヿ)ヲ(シ)ム(シ)
文化申子秋桂月
子二句井

枇杷園句集巻之一
春

年内立春

ふる年に又ふる年や追
歳且

何変もなくて年ま(ま)つ(ま)ゐ(ま)
元日ヲ日

わすれまいちほけらんと花の春

俤ゑ〳〵ゐをそれの妻

賀

やまにむや年〳〵よ年の美しき

若菜

老うたむなる菜をひとのまゐる

古のつゝりかうの

笑くぼい延せのみもちふ梅ゑ菜

芽

睦月六日夕くれ杉村をいでゝ

ゆくに杉の生垣引まうあふ梅

このもかもき菴あるも春月の雨をも

ふくるゝきしるやうて芽をお

おもふも

芽つすれに芽ぶらん月ゝ梅

梅

沢山な月日ゝお来うあるべき

花さそふ梅もさくらも日ものうらゝ
江のよや二人ゝてもる梅も花
白梅の九〻きちるみち中ゝゝ
筑州山鹿のさと〳〵秋枝氏
来る廿〻ゝゝもるひすゝ
ゝゝ夏も
夠死ぬも香よ白ひらも梅もそれ
きとるきう人のきろうゝめも食

九岳亭

ゝゝや義もゆまゝ掃ちきう
初時もそ

貴之のゝもまゝそゝめの花
梅ゝやゝゝけなくも百月お
眼も鼻も
ひゝう野ゝ

芭蕉翁肖像開眼
ゝめも花

月前

かくひまもる影やいづこ梅の花

暮雨巷法會

蓑うめのふる雨しめ湿る花白し郭

五十六山の巷六十六山も茅屋もの

山路大徳ありとそ

まゐるをいつの来ませとも

山ゐぬるきま梅も下待ひ

警

ほろゝ啼警ぬ峰も松

警に夢のうちゆめ色も郭

ゆめ〳〵忘ぬ只警もさうな

小の小庭よ掃もまゐまとて二庭掃のもとう

告うう納も

警もも忘れな梅ゐ頃ゐ

警の声清澄の水ともに
ときてやらるるきぬぎぬの空
　榊
まき榊にくさせの垢をおとす
　伊勢　ふう
まき榊ああや小あのひとの口
まき榊や暮て帷子袋掟の丈
　矢矧　ふう

まき榊の東あ、ま八百里　う雨
　冬草
いくしほ白ふ〜ふふふふる塘ふふ
　霞殿
かすかすのほく〜ふゆくえもし
古まるのきりんきのほりぬ朝うすき
　初頼
朝螺貝ふ初卵ふこふるあふ

春雪

ちる花雪ふるさくら哉もち
旅人よ雪ハふる迄とも春の宵
土山まで

浦のうら雪ふるもあそふ子供ら
春ふる

大佛のあめを見よゆくちる花ら
春風

糊するうちもなくも春の月

花

とくとくや花見るやどの北影一弦

起くるより花見るやどの茶仕舞

蚊柱るも花と見てこそ目にさむし

泳ぐふぶくる

さのみをも庵やさくらさひうつり

虎皇菴

はくくとて見てもあるしを蔦る桜かな

芭蕉堂新成矣

肖像安置一句して

蝶るもこれやこてみちのく花のみ

贈呂井

よきさよいひきものよ花みるみ

宇団の山すそ

よきほよ花のうみある山路かな

四季きそひて花盛久しきころもの

芳野行

甲子吟行に曰ひよりよりみちたくさ
たとりくるにまかせて山深く白雲
峰にまき烟谷を埋みて空も
納まるう其雨くもも降出つおほつう
なきを負きもを入ゆとくしみ清
あのとくくとゆふもちくて

山をくるる清水のさゝ此あり庵のさゝ
清水のやくを見るよとくくのさる
くるみ(ひき)ぬくる花葉袖よ清
芭蕉翁みちのくの行脚世そうえや
とのゝ毎ひくる毎思ひあるる所ゝ
そくろにそゝみ三ぬさしを宮ゝ
訪ひ来るも清栄もけうへくて
おそまそに常住の月浴そ人も

いとまみにつらぬるを
　　山路
せそ枝ふあるまゝ
　　さゝゝの
嵐山
松さゝゝ一木置もりあふ山
花もるものをくはさゝあ嵯峨の君
　　ぬまゝひ嵯峨よゆきて
湖ゝゝとゝゝおりゝ花のみ
　　木母寺

花よ転いるる霧ほろふらん
年ゝに老ぬ見やゝのかりゝゝ

眉山も芒見むおと豊宮崎の文庫も
るこゝゆ水を添ひて山村を至るを
神ふるふる山ぬやゝてそゝやと
さゝおもゝゝれゝ
芒の赤ふむすひゝみまる苞もゝ

帰路

そがひなるいしくれもとる山路哉

ふくらの土ハ粥喰ふ土ちやう

鉋おうちやをまはしくひゆく

きもの干あまのさくらの幸

ほの神宮干詣り

焼場みち幸ほのさくら

ふうりうも

玉垂行

むさのやくもみるに志つかるゝ

ものから

しぐるゝ林きを用ゐる農林

焼水死岩にむやふるいつゝ林

のさんさゝをハ然ハふゝて用を

百千にわかる百千にあそぶ人形売

もち守児や一ツあそぶ人おや世ゝき

よもハ住よ今もくりを住る人まや

ちいさき机打ち掩ひ文机の外見えもの多くかゝるに同じさまなる僧ありてくるう筆を走らせいるを人々とりかこみてのぞきみるもとゝまるのゝまゝなるものをいそぎ書うつしもらやゝありて栖弘とゝこの石よこたへてかの花のそとにも栄ちるふぜいおもふこゝろかくやうなるも

次の頁の初めまでとばす

看ける僧の戸をさしこめてゐるもそいとおもふこゝろなり。次の日を西の山にかくれぬるの見るものゝ飽しく小倉の山もそゝきホのうそそゝぐ

継夜や　おもつるのくも　ちるさくら

と吾もそゝみ給ふこの僧此おもふ

菜のよく着て待るて立ちて
むつらふまるいとうしくるもの
ふるもの

涅槃會

ふしおがむに見るもおそろしき佛のす
がたをみてゆきの涅槃像
靴買にゆくひとをみて
菜花

菜の花よ大名ぐるの梅屋敷

桂五亭

菜の花にそのよすがめよ柿衛
かくいひしかとも視すめよ
さやぶらも見て守る雀
先そんぐるも

菜花や口をすぼめて啼雀
梅よ肥るや菜花も吸ふ

蚊入

蚊入や小さき笠もちはこぶ

帰鳥

三夜二夜あそび給ふ月一ツ

西湖

此の一度生田よ芥子の咲る下

然谷まで

ゆくさきよ入る然谷暮塘の蛇

蜥蜴

住まうとも古屋小蜥蜴ゆき蜥蜴を毎る

堂

さみ迄ゆけ一人形をこゝろ

几巾

風巾をさゝれきおれ柱ゝ蛇

蛙

字一字おれくきを啼蛙

人もふえのうつもふへうす山おうち

燕

てる君燕よもちるな小魚うな
浪赤はむ中を燕の往来ふ

雉

かへる来うす帝しう焼て雉の子
ほろとふ花よ雉子く柏子飛
ろうもしてふくきくれ気

幻住菴ふて

わかおとの雉子へうる菴のあめ

雛

ひな北堂花れみようふへそめぬ
すめるもまるや雛北膳まうり

桃

伏見まを田うして来うめ北花

汐干　久能山の巌まで

汐干をも見てそ帰るゆく汐の

藤

藤のそれなからくもうれをおもふ

寒半日孔雀をねむりあり半日乃

雀をみふさりたる雀かねむるときのこ

小原のまゆともなるの言葉の言葉よ

ゆきすぎし後世菩提の法の為も

雀をねるに骨をおる人雀かな

菴のうちに杖の枝折ふる冬半日

の楽や主人もゆきすぎし迷

筐に琴を弾て月をのこす友と寺と

ふるふのわらふろをへ

山藤の柳もうごかし住居孔

題

姉こはりて弥るハ未みくり並北在
父母のあまうを休にちくすめ
義しき砂に小松のみとるも
月、花をおくる見てくれ松のう勢
花とうやさくても竹をみとう也

善光寺にて画あこのまる人北念

佛のまハり風多くひそおひ
まく〳〵お明ふ海に見ふ老くる
ひと生にるくまをまて佛の手をふ
まあそそと見申様なものまる元
北袖くもてろふあきものくよろ
ふひあそ群集〳〵くるそかし
けるまき

朝ル〳〵乱掃おそは堂そる

暮春

あさくらや雨ゆく森の
ゆくまをあそれも竹北日影哉

椿堂輯

夏

更衣

ふるそふ父のの着ん更衣

老懶

更衣人に先立紀よおとろもぬ

夏のそ机

夏のそ机もしらるる頃ゆふ男

義しきやうなれども
かきん田つゐ抔ても月抔のよ
むふるゐむ降もそを時そ
住すの楷そもそ不とゝを
抔よやまん物ハ三つもあれ部公
菩提山萱堂まそ
念佛を米かむやうにほとゝを

なるゐよ一をみちゝをゝ
犬竹法の風興事ことよひ農
月孫義よ法みそほゝまれ来
ゐきやまきちとて二三子い
例の瓢抔素て打下の飯に塩の豆
やそちぶめ
近ハ誰をやゝ抔ゝを

蓬さうやいつまでこまごまら名柴

竹吟殿まで

竹吟等をつくる神のつら美哉

茂

ふしぶしの嫁の名こも苔まで

清佛

尾花ら崎をゆきるるて山み

かくほどもなく旅ゆくひとの孫

そそもむろ北山にはせ参

花ら堂をはきはきふふ

笠はふるる佛ふるる海まひふ

竹子蛸牛

まつのまやる供多てこも寺の門

城ふさて牛のまをふおまを

伊勢ふあいきのふ神ふ蛸牛

牡丹

ちゝくさ　牡丹つくも堀の内

筍葉

ふた代筍葉はくる山あふ舟

花子

白きつゝ窮屈もちき小あふ

あゝるふる又咲あふ今の花

苔花

苔生ものゝ花咲ぬ雨もちぬ

連翹

連翹鳥

宋古るる葉柴まつ実花の中

蚊帳

蚊帳

連日のあめ

日まくるまゝ

蚊帳ときくる

領ひろふやすめあるもく蚊屋の外

蛍

青丸笠や大牛原をゆくそうそう

粽

此殿やむくろのさくら粽

うぐひすもいくらもゐとくちまねく

五月雨

五月雨のいや小袖ちきタかな

菅津の里

きみまろやめを屋の塀る雁

栗子の峠

ひとり多つ警の白さよ月雨

竹酔日

まつ植る日もひとのまつ松を植

牛ちまて立ちて人の住居もきまと仏俗

ちるを以て人のてれ業もきゝ覚えて俄に小さき紀竹を植えしを
ちゝにおもしろき人といひまるつもて
やもめ〳〵ゑひまてと息その悟すもれ
まき冨

むしろ敷てしくるゆふ雨ゆく春山嵐
まき田

くるてきる山田もと庵の夏かる

いせ吉兵衛の茶店ふ
田を植ふびともの足ぬいさらい
わさのふるす

雨をみ垣皇ゆかいまき田う郎し

水雞

さゝよへハムルお池おるそのの門
古井のさと雨く風く亭まを
ちゝゆるまを水雞の小田をふまを

紫陽花

紫陽花やうつろふ色の木のもと

夕立

夕立やもらひそこなふ老の枝

杖

郭川

待ちもせぬ人こそ多く郭舟孔

金花山の麓ふさぐ

郭のかどを曲がる長さや灯の一つ

短夜

みじか夜や窠屋に残る笠と雫

夏月

大秦を休む色もなき夏の月

夏の月ぬき〳〵もつゆふ哉

園扇

光琳の

ちらり峰もなり

古園扇

清水

驚ル笹葉ヲ蝉ノ露

蝉

蛭ノ口掻ヲ蝉ノ小ホトヽギス

蓮

宮旅ノ仏ニ参ヨ蓮ノ花

暑

あつまりや小庭ノ柳小ゆるぎ

大蟻ノ力こぶをあまくあり

雲峰

乗ることに掛るおさまぬ雲の峰

夕くち

夕くちや机ニ倒ル大の字

納涼

あつ物ニ出ル汗ヲ栗と稗

居こゝろ(ホ)すゝき月ヲ見むる

檀溪

すゝきに人の来ぬる寺菴うら

丙午九年六月木芽にゆむ谷の
ひまゝ雪をはく〳〵松原のおく花を
ゆく〳〵四時のけしきひとゝ
のこるものから何そ別に仙境を
尋ぬる

一字一字の多きよ木芽も
吐吸

市枝

市枝〳〵ちゝや花いろも枝うら

宇洋輯

枇杷園句集

坤